

# 日光修験における「四季の峰」の成立

大和久 震 平

この論文は山岳修験学会第10回学術大会における研究発表をまとめたもので、発表のうち、入峰修行の典拠とされる諸記録が中世に撰述された偽書である点の考証は除いてある。偽書の撰述とこの歴史的役割については、拙稿「日光修験と偽書の成立」（帝京短期大学紀要第7号）で委細を尽くしてある。表題の論文は紀要論文の後編という意味合いをもっている。

奈良時代に始まった山林仏徒の山中修行は、純粹密教（純密）の渡来と神仏習合思想の蔓延によって次第に隆盛となり、信仰の山々では、平安時代末から鎌倉時代初めにかけて山中修行の体系化が計られ、修行者の教団が相次いで成立した。これが修験道の確立期であって、山中修行は修験道の根本儀礼として位置づけられた。本来修行は冬の山中の籠り修行に主眼が置かれていたが、専門山伏の強化育成の目的もあって内容が次第に分化し、入山の時期は春夏秋冬の四季に分かれ、重点が定点の籠り修行よりも連山を縦走する苦行に置かれるようになった。これらの山中修行を「入峰」「峰行」「峰入り」、或は単に「峰」と呼ぶようになった。

論文の主眼は四季の峰行が齊一に成立したものでなく相互に時代差のあることと、峰行の実践された地域は同一でなく異なった山地に実施されたものであり、これには明確な理由があったことの二つに置いてある。日光修験の峰行は「三峰五禅頂」と呼ばれる。三峰とは冬・春・夏の三峰行、五禅頂は五組が相次いで入山する秋峰で、このうち冬・春は両峰と呼ばれ、足尾山地で継続して実施される。五禅頂は男体山を中心にする日光山地に入峰するもので、夏峰は足尾山地から入り日光山地を通して山地のはじめに抜ける。これらの峰行のうち五禅頂が最も古く祖形の成立は12世紀頃、両峰がこれに次ぎ13世紀前半頃、夏峰は14世紀初め頃と考えてみた。両峰は大峰山の古い形態の法が導入されたものとみてよく、夏峰も「大峰奥駆け」の古い形態を模倣したものであろう。奈良時代以来の修行を踏襲する峰行は五禅頂と考えてよい。

（『山岳修験』第7号、101～109、1991）